

教育研究業績

2022年5月1日

氏名 遠藤理一

研究分野	学位
観光社会学、観光史、歴史社会学	博士（観光学）

研究内容のキーワード

観光、占領期、米軍、移動、文化接触、異文化コミュニケーション

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例 札幌ベルエポック製菓調理専門学校 「社会・店舗運営」、「社会」	2017年4月～ 2019年3月	①学生の個人課題発表として、各自が実習で取り組んでいる製菓商品について、名称の日本語の意味や由来、現在までの変遷について調査・発表を行う授業を実施した。②札幌市で製菓店をオープンさせることを想定し、ケーススタディと参考書を解説した上で、立地調査、保健所への届け出、商品ラインナップ、陳列などについて教えた。③アクティブ・ラーニングの取り組みとして、②をもとにした店舗運営案の計画・発表授業を実施した。
西武文理大学「観光サービス論」「観光資源論」「観光まちづくり論」「地理学」「ニューツーリズム論」	2021年4月～	講義では観光学・社会学・地理学などの概念・理論的な基礎を紹介するとともに、各分野で取り上げられることの多い事例をその理論的視座から説明している。また適宜学生によるディスカッション、発表、質疑応答を設け、主体的な学びを促す授業づくりを心掛けている。また各授業の講義後にはウェブ上でのアンケートを実施し、学生の振り返りや質問・感想の記述を促すとともに、次週の講義で回答することにより、理解の進展を促している。
西武文理大学「基礎ゼミ」「専門ゼミ」「卒業研究」	2021年4月～	観光学の基礎的な理論・概念の修得と、自らの研究テーマへの応用を目的とし、テキストや研究の発表、および学生主体の議論の練習を行っている。また研究課題の設定・調査・とりまとめと発表の練習として、埼玉県西部地域でのフィールド調査を実施した。
星槎大学「国際観光論」	2021年4月～	主に社会人学生を対象とした4回分の集中講義にて、インバウンド・ツーリズム、コロナ禍のツーリズム、マイノリティのためのツーリズム事業についての講義を行った。遠隔講義であることからZOOMのチャット機能を用いたQ&Aや意見の発表を行った。
立教大学「演習（2年）A」「演習（3年）A」「卒業研究演習」	2022年4月～	観光社会学・文化社会学の基本文献の輪読を行うとともに、学生主体のディスカッションのファシリテーションを行っている。講義後にはGoogle Classroomを利用し、振り返りと講義中に発表できなかった意見の書き込みを促している。講義のはじめには前週の議論の要点と捕捉、論点の提示を行い、議論の進展に向けたサポートを行っている。
2 作成した教科書、教材		
札幌ベルエポック製菓調理専門学校 「社会・店舗運営」（平成30年度）、「社会」（平成31年度）	2017年4月～ 2019年3月	『製菓衛生師全書 和洋菓子・パンのすべて』（日本菓子教育センター、2011年）を指定教科書としつつ、適宜レジュメやパワーポイントを用い、教科書の内容をまとめ、補足事項や課題についての説明を行った。
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
5 その他		

職務上の実績に関する事項				
事項		年月日	概要	
1 資格, 免許				
2 特許等				
3 実務の経験を有する者についての特記事項				
4 その他				
研究業績等に関する事項				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1『戦後京都の色はアメリカにあった!—カラー写真が描く〈オキュパイド・ジャパン〉とその後』	共著	令和3年7月	京都文化博物館	京都文化博物館の特別展「戦後京都の「色」はアメリカにあった!」の図録での解説の一部を担当した。特別展のテーマは占領期京都に駐留した米軍関係者が撮影したカラー写真の展示であり、筆者は「米軍ツーリズム」の視点から写真解説文を寄せた。著者は植田憲司、遠藤理一、長志珠絵ほか11名、筆者担当部分タイトルは「コラム10 米軍ツーリズム」(pp. 110-111, 担当ページ2ページ、総ページ数118ページ)。
(学術論文) 1占領者の「不安定な共感」—米国人による占領下日本旅行記の対面相互作用論的分析(査読有)	単著	令和4年3月	観光学評論 10巻1号, pp. 3-15	占領期日本に関する米国人による旅行記を考察した論文。旅行記を対面相互作用の観点から分析し、当時の国際協調路線にある米国・米軍が米国人に求めた「非公式の外交官」とどまらないあり様を浮かび上がらせるとともに、その記述にみられる「不安定な共感」の意義と問題性を考察した。
2「移動的な社会としての占領期日本に関する観光的考察」(査読無)	単著	令和2年8月	「北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院博士後期課程 学位請求論文」 pp. 1-402	所属大学院に提出した博士論文。占領期と朝鮮戦争期の日本における観光事業と観光旅行について探ることから、占領期日本について、人々が移動し接触した時期としての側面に光を当てた論文。占領期において日本を平和・民主主義国家に改革する占領改革が行われた一方、それが強制的に権力関係を伴って行われたことが批判されてきた。本研究では実際の場所や人々のコミュニケーションにおいて、平和・民主主義がどのように演示され、経験されていたのかを探った。そして実際の場において米国人にも日本人にもそれらが疑われていたこと、一方で連合軍将兵たちの中に、日本人との接触を通じて、GHQが持っていた矛盾を問い直し、日本の人々に関する偏見混じりの認識を更新させるという経験が生まれていたことを指摘した。本論文について、5年以内に学術書としての出版を目標に加筆修正作業を行っている。

3 「Reforming Heritage and Tourism in Occupied Kyoto (1945-1952): How to Create Peace when Surrounded by the Atmosphere of War」 (査読有)	単著	平成31年12月	「Asian Journal of Tourism Research」、Asian Journal of Tourism Research、3巻2号、pp.95-120	占領期の京都市における観光事業と観光旅行を事例とし、占領期の京都が観光地になっていく過程を論じた。東京や横浜に駐留する連合軍将兵たちは空襲がない場所を「日本的」な場所とみていたこと、京都市が「平和的」な場所を自認して連合軍向けの観光事業を活発化させたことを論じ、未だ焼け跡が残る日本において、観光を通じて日本の「平和」を演出し体験する実践として結論づけた。英語論文。
4 「占領期日本におけるアメリカン・ヘゲモニーと観光—戦後日本のトランスナショナルな観光史に向けて」 (査読有)	単著	平成31年12月	「旅の文化研究所研究報告」28号、旅の文化研究所、pp.1-13	旅の文化研究所の助成による米国立公文書館等での資料調査の成果を発表した。占領期におけるGHQと米軍による観光事業を調査し、占領初期の米軍兵士向けのレクリエーション政策から観光事業を通じた日本経済の復興計画、朝鮮戦争期の帰休兵に到る流れを把握した。これを東アジアへのアメリカン・ヘゲモニーの拡大の文脈に位置けるとともに、日米の軍・政府の協働による性的搾取を含んだ事業展開であったことを指摘した。
5 「Reforming Heritage and Tourism in Occupied Kyoto (1945-1952): How to Create Peace When Surrounded by the Atmosphere of War」 (査読有)	単著	平成31年12月	「International Conference on Future of the Past: Tourism and Cultural Heritage in Asia 2018」 pp.473-490	立命館大学で開催された国際シンポジウムのプロシーディングス。占領期の京都の観光をめぐる京都市役所による観光事業とそれにまつわる語り、および連合軍将兵の京都観光をめぐる語りについて論じた。そして当時の京都が「平和な場所」として自認し、体験されていたことを明らかにするとともに、そこでの「平和」のバーチャルな性質について考察した。英語論文。
6 「ツーリズムからみる戦後日本の平和主義」 (査読無)	共著：金ソンミン・遠藤理一	平成31年7月	「Island Peace Forum: the Cold War Landscape and Peace in the Northeast Asia」 Jeju Peace Institute、pp.183-190	済州4.3事件70周年を記念した国際シンポジウムにおける、金ソンミン北海道大学准教授との共同発表のプロシーディングスで、遠藤は第二著者として執筆した。戦後日本における平和主義について、観光の視点からその変遷を論じることを提案した。とくに (1) 占領期の平和演出、(2) 1950-70年代の平和運動、(3) 1980年以降の平和消費をキーワードとし、遠藤は (1) について占領期の観光事業、(2) について1950-70年代における北朝鮮への視察旅行を論じた。日本語および韓国語論文。
7 「『復興』の演出と承認—占領期日本における『観光』と『アメリカ』のまなざし」 (査読有)	単著	平成30年7月	「年報社会学論集」30号、関東社会学会、pp.87-97	占領期日本における観光の分析を通じて、米国を超越的な他者とみなす感覚と結びついた日本のナショナル・アイデンティティの性格について検討した。とくに1948年に国際観光客の来日が許可されるまでのGHQと日本政府の政策過程、ツアーの行程、ツアーをめぐるメディア表象を論じた。そしてこれを「アメリカ」に向けて日本の「復興した」姿を演出することでナショナル・アイデンティティを再構築しようとする実践であったと結論づけた。

8 「Reforming Japan in Tourism: GHQ Surveillance and Japanese Tourism Space, 1945-52」 (査読無)	共著:遠藤理一・金ソンミン	平成30年3月	「Tourism in Asia II: Travelling Asia and Geographical Imaginaries」 Seoul National University A-sia Center、pp. 25-40	ソウル大学東アジア研究センターでの国際シンポジウムにおける、金ソンミン北海道大学准教授との共同発表のプロシーディングスで、遠藤は第一著者として執筆した。占領期日本における日米の人々の日常生活に関わるヒエラルキーについて、フーコーの「統治」の観点から分析し、GHQの許容と禁止を織り交ぜた権力性が、いかに占領期日本の空間における統治性として作用したのかを論じた。日本語論文。
9 「リカバー・ジャパン/ ディスカバー・ジャパンー野田宇太郎の文学散歩と占領期の『風景』」 (査読有)	単著	平成29年3月	「文化/批評=Cultures/ Critiques」7号、国際日本学研究会、pp. 3-21	詩人・編集者の野田宇太郎が1950年より始めた近代文学作家ゆかりの地を巡る「文学散歩」を事例に、占領期日本における日本人々にとっての象徴的な空間をめぐるせめぎ合いについて、「風景」に関する文化研究における議論を理論的視座として論じた。野田の戦前からの経歴と語り、文学散歩の仕方、記録媒体の形式・内容を取り上げ、野田にとって占領下の日本が「風景」のアメリカ化と感じられていたこと、「風景」を取り戻す活動として文学散歩が行われたことを指摘した。
10 「占領期日本における観光空間の再編に関する理論的・実証的研究」 (査読無)	単著	平成29年1月	北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院博士前期課程 学位請求論文、pp. 1-152	所属大学院に提出した修士論文。占領期日本における観光事業と観光旅行について論じた。資料調査によって、GHQが経済復興の目的から観光事業を推進していたこと、日本政府も経済復興と国際世論の改善のために「観光立国」を提唱していたことを明らかにした。また連合軍将兵が盛んに観光していたこと、日本人も占領期の終盤になると、空襲で焼けた街や、失われた「日本文化」を訪ね歩くといった旅行が行われていたことがわかった。本論文はこれを、日本で明治期以降、国家的な「風景」が表象され、語られていたことに着目しつつ、敗戦直後に「風景」が変容するとともに、GHQと時に協働し、時に摩擦を起こしながら再構築されようとする動きとしてとらえ、戦後日本の復興をトランスナショナルな過程として考察した。
(その他)				
学会発表				
1ゲストレクチャー [観光が生み出す「平和」とは?ー占領期 (1945-52) の観光から]	単独	令和4年3月	立教大学 演習 (2年) B、Zoom	立教大学観光学部観光社会学ゼミにてレクチャーを行った。観光が平和や安全・安心を演出する側面について、占領期日本の日本政府および観光業による「観光立国」政策、米軍による将兵向けのレクリエーション、ツーリズム事業を事例とした説明を行うとともに、観光を倫理的に検討する際のキー概念としての「不安定な共感」について説明した。
2展示解説「旅行する米軍将兵の家族写真」	単独	令和3年9月	京都文化博物館オンラインギャラリートーク、zoom	京都文化博物館特別展の企画としてオンラインでの展示解説を行った。展示中の写真のうち米軍将兵の家族写真を取り上げ、当時の日本の旅行会社の事業について、また冷戦期米国が家族を駐留させた政策決定の流れについて解説した。

3「コロナ禍社会におけるハイブリディティと「空気支配」のポリティクス」	単独	令和3年8月	COVID-19以後の新たなモビリティ・パラダイム——モビリティを越えるモビリティ研究、立命館大学	ロンドン大ピーター・エイディ教授を迎えた立命館大学人文科学研究所主催シンポジウムでの発表を行った。コロナ禍に関わる科学と身体・感情がない交ぜとなった社会現象を取り上げつつ、日本社会に特徴的な異種混交的現象としての「空気」の系譜としてコロナ禍の社会現象を認識し、モビリティを捉える必要性についての問題提起を行った。
4シンポジウム「ライティング・ツーリズム——COVID-19以降の観光研究とは」コメント	単独	令和3年7月	観光学術学会第10回大会、zoom	コロナ禍において観光を研究する・記述することの意味を問い直すことをテーマとするシンポジウムにおいてコメンテーターを担当した。ポストコロナ人類学の問題提起を踏まえた視点をベースとしつつ、発表者4名の研究発表にコメントし、ディスカッションを行った。
5パネルセッション「パンデミックとツーリストの主体性」趣旨説明	単独	令和3年6月	カルチュラル・タイフーン2021、zoom	カルチュラルスタディーズ学会年次大会にて、コロナ禍下におけるツーリズムをテーマとしたテーマセッションを企画し、趣旨説明およびディスカッションを行った。コロナ禍においてツーリストをめぐる語りや硬直化するなかで、ツーリストの行為主体性を浮かび上がらせるという趣旨を述べた上で、報告者4名の発表内容を紹介した。
6「見物する米軍将兵と「アメリカの世紀」——第二次大戦後における米軍将兵向け観光ツアーを事例として」	単独	令和3年6月	関東社会学会、第69回オンライン大会、zoom	占領期日本における米軍や関係機関による将兵向け観光ツアーがどのような意図のもとで運営されていたのかを探った。報告では第二次大戦時のヨーロッパでの観光ツアー、占領期日本の東京や京都・奈良での観光ツアーを取り上げ、将兵向け観光ツアーには米軍が将兵たちを教養ある米国人に教育する意図があったことを指摘した。
7「占領期京都と米軍観光」	単独	令和2年11月	京都カラー写真研究会、Zoom	京都市博物館で2021年に開催予定の、占領期の京都に関する特別展の企画運営に向けた研究会「京都カラー写真研究会」に参加しており、研究発表を行った。占領期の京都でどのように観光事業が行われていたのかをレビューしつつ、京都が空襲がなかった平和な街として表象され、体験されていく状況を説明した。この発表の一部は京都新聞に掲載された（『京都新聞』2020年12月12日朝刊）。
8「Brief Talk ab-out the Tourism in the Japanese Occu-pation Period and its Aspect of Dark Tourism」	単独	令和2年9月	和歌山大学、ダークツーリズム研究会、Zoom	和歌山大学観光学部が主催するダークツーリズム研究会に招待いただき、講演を行った。博士論文の内容の一部である、敗戦直後の広島での観光事業と、英連邦軍の将兵によるツーリズムについて説明し、当時のピースツーリズムがどのような意図で計画されていたのか、現在からみてそこにどのような課題があるのかを説明した。

9「改革を疑う将兵たち—— 占領期日本における米軍将 兵の観光をめぐる『経 験』」	単独	令和2年6月	観光学術学会、観光学 術学会第8回大会、立 命館アジア太平洋大学	占領期日本に駐留した連合軍将兵たちの観 光経験に着目し、当時の観光における占領 改革とは異なる社会的意義を探った。事例 として米軍の余暇・観光事業、将兵たちが それらをどのように利用したのか、また観 光業の媒介に関わらない日本人々との偶 然的な接触について調査した。そして将兵 たちが観光旅行において日本人々との接 触を忌避した一方、日常的な接触におい て、他者・異文化認識を改める経験をして いたことを指摘した。
10「兵士から観光客へ—— 占領期日本におけるアメリ カ陸軍によるツーリズムを めぐる政策を中心に」	単独	令和元年7月	観光学術学会、観光学 術学会第8回大会、立 命館アジア太平洋大学	占領期日本についての研究をグローバル・ ヒストリーに位置付けるという問題意識か ら、米軍による余暇政策について論じた。 まず第一次大戦および第二次大戦における 米軍の余暇政策をレビューし、占領期日本 における余暇政策について説明し、次に米 軍の余暇政策における3つの目論見—将兵の 性病対策および教育、現地の人々への米軍 が友好的であることの見せつけ、米国内へ の占領地での将兵たちの豊かな暮らしの宣 伝について論じた。
11「The Role for Tourism in Cultural Reconstruction in the Japanese Occupation Period」	単独	平成31年9月	TLLP Study Session、 オーストラリア・メル ボルン大学	所属大学院が共催する国際交流プログラム での発表。敗戦後の日本の復興に関して観 光事業が果たした役割について論じた。と くに日本で「平和国家」が目標とされる中 で観光業者が「観光立国」を唱道し始めた 状況、GHQとの協働により国際観光事業が推 進し始めたことを説明した。反面で焼け跡 の整備や人々の処遇などへの具体的な施策 がなされていないことを指摘し、観光を通 じた復興の「バーチャルな平和」としての 側面を論じた。英語。
12「Reforming Heritage and Tourism in Occupied Kyoto (1945-1952): How to Create Peace When Surrounded by the Atmosphere of War」	単独	平成31年8月	International Conference on Future of the Past: Tourism and Cultural Heritage in Asia 2018、立命館大学	立命館大学で行われた国際シンポジウムで の発表で、占領期京都の観光を論じるこ とから、占領期日本における平和にまつわ る実践と言説のもつ「バーチャルな平和」 としての側面を考察した。英語発表。
13「ツーリズムからみる戦 後日本の平和主義」	単独	平成31年7月	Jeju Peace In- stitute, Island Peace Forum: the Cold War Landscape and Peace in the Northeast Asia、韓 国・済州Kalホテル	済州4.3事件70周年を記念した国際シンポジ ウムにおける金ソンミン北海道大学准教授 との共同発表で、遠藤は第二発表者として 発表した。前述の「3. その他 ① Proceedings (2)」に基づき、戦後日本に おける平和主義について、観光の視点から その変遷を論じた。発表は日本語（韓国語 への通訳あり）
14「戦後日本における文化 表象としての平和——占領 期（1945-52）における『観 光立国』の実践を事例とし て」	単独	平成31年6月	カルチュラル・スタ ディーズ学会、カル チュラル・タイフーン 2018、龍谷大学	自身がオーガナイザーを行ったパネル 「『日本』をめぐる移動の語りと実践— ツーリズム・移民の出会いとすれ違い」で の発表。占領期日本における観光事業がい かに「平和国家」の立ち上げを唱道し、ツ アーガイドや報道を通じて日本の平和な姿 を見せようとしたのかについての検討を通 じて、占領期日本の「平和」の性格を「文 化表象」の視点から考察した。
15「占領期日本の観光空間 における『演出』と『発 見』をつうじたナショナル アイデンティティの再構築」	単独	平成31年4月	旅の文化研究所、第24 回旅の文化研究フォー ラム、シェラトン都ホ テル東京	旅の文化研究所の助成を受けた調査の成果 発表を行った。米国立文書館、米国議会図 書館、メリーランド大学図書館で収集した GHQの行政資料、連合軍将兵の旅行記、GHQ によって検閲を受けた文書を紹介しなが ら、占領期におけるGHQおよび米軍の観光 をめぐる政策をレビューした。

16 「占領期日本の米国人観光における『戦後日本』へのまなざし」	単独	平成30年11月	日本社会学会、日本社会学会第90回大会、東京大学	占領期日本における連合軍将兵やその家族、ジャーナリストが登場する新聞・雑誌に注目し、描かれた「戦後日本」像とその再帰的な効果について検討した。(1) 将兵たちが日本をどのように語ったのか、(2) 日本のメディアが将兵たちの語りをどのようにフレーミングしたのか、(3) 日本人々が将兵たちの語りをどのように反応したのかを論じ、実践主体が互いに意識し合うことによってエキゾチックな日本の像が表象され、日本の観光業者が「アメリカからも評価された」日本像を宣伝する状況が見られたことを指摘した。
17 「American Soldiers as Foreign Tourists and Interactions of 'American tourist gaze' in the Japanese Occupation Period」	単独	平成30年9月	European Association for Japanese Studies、15th International Conference of the European Association for Japanese Studies、ポルトガル・新リスボン大学	占領期日本の観光事業の展開における、米軍将兵たちによる日本をめぐる語りの役割について論じた。占領期には将兵たちの日本についての好意的な発言が頻繁にメディアに掲載されたが、その内容に将兵たちと日本の記者との間での暗黙の結託が見られたこと、それらのメディア表象が国家・地方政府で観光事業を推進する根拠とされていったことを指摘しつつ、占領期に日本イメージが再構築される一側面として考察した。英語発表。
18 「『観光立国』が生産する中心と片隅——批判的観光研究の視点から」	単独	平成30年6月	カルチュラル・スタディーズ学会、カルチュラル・タイフーン2018、早稲田大学	自身がオーガナイザーを行ったパネル「『観光立国』が生産する中心と片隅——批判的ツーリズム研究による介入」での発表。1948年に日本交通公社が幹旋した国際観光客向けのツアー・ルートを取り上げ、空襲被害の少なかった場所、「皇国主義的」とみなされた神社や「後進的」とみなされた闇市などを除いた場所が案内されていたこと、そうして選別されたルートが「本当の日本の姿」と宣伝されていたことを論じ、観光事業を通じた包摂と排除の問題を提起した。
19 「Reforming Japan in Tourism: GHQ Surveillance and Japanese Tourism Space, 1945-52」	共同：遠藤理一・金ソンミン	平成30年3月	Tourism in Asia II: Traveling Asia and Geographical Imaginaries、韓国・ソウル大学	ソウル大学東アジア研究センターでの国際シンポジウムにおける、金ソンミン北海道大学准教授との共同発表。金ソンミン准教授が紹介と質疑応答を行い、遠藤は発表の大部分を担当した。統治性の観点から、占領期日本における連合軍の様々な政策がいかに日本人々に影響したのかを論じた。発表は日本語（韓国語への通訳あり）。
20 「占領期日本における観光空間の再編とナショナルアイの再構築」	単独	平成29年10月	日本社会学会、日本社会学会第89回大会、九州大学	敗戦後の日本が経済的かつ文化的に再構築されようとする過程において、観光がいかなる役割を果たしたのかを論じた。とくに日本・地方政府、日本の観光業者が、全国各地に駐留する米軍に向けた観光事業を通じて、経済的な復興を目指したこと、また「平和国家」「文化国家」としての日本を見せることで国際世論を改善させようとしていた状況が見られたことを指摘した。
21 「Tourism in Occupation Space and Penetration of American Hegemony into Society of Post-war Japan」	単独	平成29年7月	TLLP Study Session、北海道大学	所属大学院が共催する国際交流プログラムでの発表。占領期日本をグローバル・ヒストリーに位置付けて論じるという問題意識のもと、当時の観光がいかに軍事的・経済的・文化的な米国の覇権を強化させるものであったのかを論じた。とくに米国人向けの観光を自発的に展開していく仲介者としての日本・地方政府、日本の観光業者の役割に注目し、異なる利害に基づいた日米の協働による戦後復興のあり方について考察した。英語発表。

22 「演出される『戦後日本』および『復興』の重層的構造——1947-48年の訪日インバウンド・ツアーを中心に」	単独	平成29年6月	関東社会学会、関東社会学会第64回大会、上智大学	1947-48年における国際観光客の来日をめぐるGHQと日本政府の政策過程、ツアーの行程、ツアーをめぐるメディア表象を論じた。そしてGHQがこのツアーをあくまでも経済復興政策の一環として捉えていた一方、日本政府は「平和国家」の確立のための策という文化外交的な意義を見出していた側面を指摘し、戦後日本のナショナル・アイデンティティの性格を示す事例として結論づけた。
23 「Reformation of Tourism Space in Japanese Occupation Period (1945-52)」	単独	平成28年11月	International Workshop on Creation of V-values in Tourist Sites、北海道大学	所属大学院が主催する国際ワークショップでの発表。占領期日本の観光に関する研究成果がほとんど見られないことを指摘した上で、日本交通公社が米軍将兵向けの観光事業を行っていたこと、自由に旅行できる米軍将兵に対する日本人々の反感が高まっていたことを紹介し、占領期日本の観光についての議論から1950年代以降の日本人々のナショナリズムや米国へのアンビバレントな感情の背景を理解できる可能性について論じた。英語発表。
24 「A New Space in Occupation Period and a National Landscape of Promena-des Littéraires」	単独	平成28年6月	TLLP Study Session、英国・シェフィールド大学	所属大学院が共催する国際交流プログラムでの発表。詩人・編集者の野田宇太郎によって1950年より行われた「文学散歩」について、その実践の背景、および野田によって書かれた「文学散歩本」の内容について論じることから、野田の実践のねらいが戦後日本における「風景」のアメリカ化への対抗にあったことを論じた。英語発表。